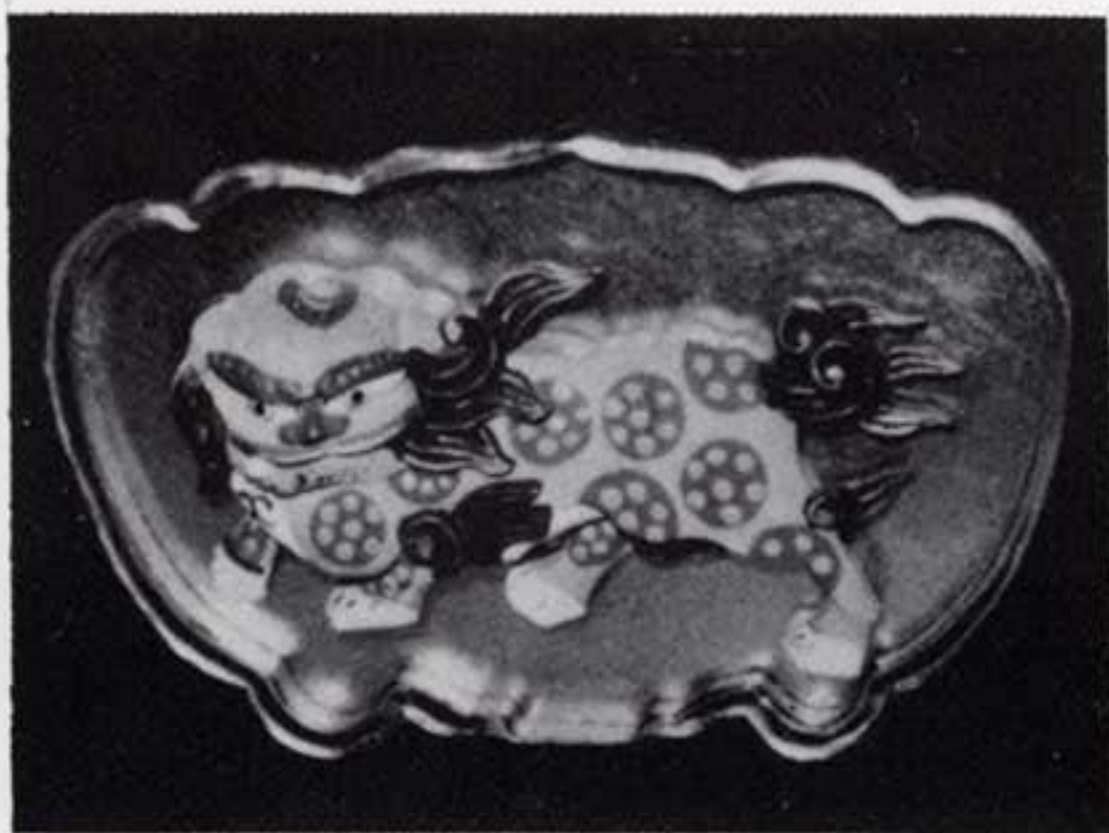


浄土

1986-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別授受承認誌) 第三二五号
昭和六十一年十月二十五日印刷 昭和六十一年十一月一日発行
第五十二卷 十一月号





十一月の秀句

口に袖あてて行く人冬めける

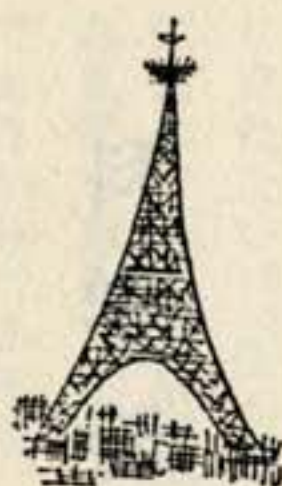
高浜 虚子

あたたかき十一月もすみにけり

中村 草田男

浪々のふるさとみちも初冬かな

前田 普羅



無量諸仏を見奉ることを得るが故
に諸仏現前に授記し給う。

——『観無量寿経』真身観文

目 次

—— 法 話 ——

科学時代の信仰への警鐘……………北 山 良 祐……(2)

祖母の思い出から……………曾 田 文 雄……(6)

<連載> **一紙小消息** ⑯……最終回……

間断しない念仏……………村 瀬 秀 雄……(11)

み仏とともに =20=

——緯書学への道——……………安 居 香 山 ……(22)

<寄 稿>

唐沢山阿弥陀寺参詣記……………築 地 泰 賢……(18)

読者のページ

自 縄 自 縛……………吉 田 勇之助……(32)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(十四)……………木 下 隆 一……(27)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第29回

……………寺 内 大 吉……(35)

風含む山陵・才子変身

挿絵 松濤 達文

表紙絵「吉 祥 草」 松浦春子 画

科学時代の信仰への警鐘



毎日曜日の午後八時が、待ち遠しい昨今である。

それは、NHKの大河ドラマ「いのち」がブラウン管を通して映写される時間である。

恐らく、大勢の人が私と同じような期待でもって視聴しているであろう。

「医は仁術」を地でいっている描写だからだろう。

「人の感情」を切なく描写しているからでもある。

ろう。

私は日曜朝八時三十分のTBSの時事放談をこよなく好んでいる。大方の用事は調整してまで見ているのであるが、それをウツラウツラしてしまうことがある。大好きな野球やプロレスの実況も居眠りしてしまうことが多い。然るに「いのち」は早朝（年間四時起床）起床し、日曜であるが故に寺役が極めて忙しいことが多いため、終日休みな

北^{きた}山^{やま}良^{りょう}祐^{ゆう}

（焼津市光心寺住職）

く法事などで駆けずり廻って、かなり疲れる筈だが居眠りしたことがない。それ程「いのち」は気合いが入って観賞している。そして四十五分間に最低一度は目にハンカチを当てている。

女優名は知らない（俳優や歌手の名を殆んど知らないし、知ろうとしない）が、高原未希（今は岩田未希）の人間味豊かな人との対応に魅せられるのではないかと思う。

未希に限らず医者者の技術は、先人の成果を出発点として成り立つ。

然し「医は仁術」と古来より謂われているが、その医の仁術が総ての医者がやっているとは言えないようだ。その医が仁術であるためには、仁術についての論理（理論の結論）を出発点としては成り立たない。「医が仁術」であることの可能性は、仁術についての論理の慣習こそが不可欠の要因である筈である。従ってその人の精神性によるものであるからであろう。

未希は東北の豪農の、小作を大事にし可愛がった両親の愛情の中で豊かな霊肉の育ぐくみを得

た。未希の心の中に「人さまに親切をする」という性格が不知不識の中に出来上がっていた。その心によって、自分の母親と同じように無医村で哀れに死んでいく人を見捨てておくことが出来ない思いが、医者への道に進ましめたようであった。

「医は仁術」が既にその時、未希の心のバックボーンとなっていたのである。だから医学の勉強、研究、実験と共に「医は仁術」を体験しているのである。

いやに丁寧に未希の心を私なりに分析的に解説してみたのであるが、これは後記することと極めて関連が出て来るからである。

さて、医の技術は先人の成果を出発点として成り立つと述べたが、科学文明は悉く先人の努力研究の結晶を研究者の出発点として捉えて行うのであるから日進月歩なのである。テレビの構造を弁えなくてもNHKのボタンを押せば、日曜午後八時には「いのち」は映るのである。そのようにして今日は科学万能の世の中である。

車の運転にしても、炊飯器でご飯を炊くにして

も、その出来上った製品（先人の成果）を手に入れた時点で成果のものの用を足すことが出来るのである。だが車の出来上る工程も判からないし、炊飯器の完成過程を知らない。それでもそれで通用するのである。世の中のすべてのモノをそのようにして私達は生活をしている。だからモノ的生活は勿体ない程恵まれている。そうして何時の間にか、先人の成果を出発点にしていく慣行が精神分野にまで浸透して来て了っているということがないとはいえない程になっている。

法然上人は、

“只々一向に念仏すべし”

と十八歳から四十三歳に至る間、“木曾の小冠者、義仲が京に乱入の折、三日聖教を見ざりし”と謂う程に刻苦勉励・修行精進されたのである。そして善導大師の観経疏の熟読五遍目にして願意を領得して念仏信仰を開顯して、

“只々一向に念仏すべし”

に到達せられ給うたのであろう。

人さまに親切にするという家庭の人間味豊かな

温かい育くみが未希にはあった。それによって未希は“医は仁術”を自然体得し、それによって無医村療にとり組んだのである。

私達には、果してお念仏するという信仰的家庭環境があったであろうか、又あるであろうか。若し、なかったり、ないとしたら、先ず信仰するという心を培かい育てねばならない。それがなかったら、“只々一向に念仏すべし”は出て来ない。

残念ながら現今、誠に多くの家庭環境は信仰に余りにも距離があり過ぎる。ラゴラの多くなった寺院は、それなりに評価される点を多としながらも、念仏者でなければならぬラゴラは、今の寺院様態から容易に育つてであろうかと自ら省みて慚愧している。

寺院は念仏のあるところでなければならぬ。然るに物的考え中心の氾濫の時流は、それを稍々もすると妨げているのではないだろうか。

恰かも、保険制度によって、医の本来的使命が、備付帳簿だ、提出書類の雑務に追われて手ばかりを生じているように、私たちにとても寺院

本来の信仰の心を失なつて、念仏する空氣が寺院自体に余りにも在り難くなつてしまつてゐる。

そうして物的優先、科学万能の息吹の中で育つた私共は往々にして、その育つた空氣を当り前と考える傾向を性格づけてしまつてゐる。まさに科学の領域のように、それは先人の成果を出発点とする考え方である。だから、

「只々一向に念仏すべし」

を信仰の精神鍛錬（信仰遍歴）を経ずして、頭で理解した「只々一向に念仏すべし」の宗祖の体験の到着点を、自らの出発点と置き換えてしまつてゐる虞れがないのではないだろうか。

口称念仏「只々一向に念仏すべし」は易修易行であつても、それは苦修錬行によつて到達し得た心境のものである筈でなければならぬ。苦修錬行という信仰深化（進化）の過程を経ずして悟境「成果の到達点」を信仰に於ても自己の出発点と置き換えてしまふから、しかも導師であるべき教化者がそうであり易いから、その育成感化を受ける者（檀信徒）も亦形骸的信仰に陥つてしまふので

はないだろうか。それが相乗して、まさしく現代を信仰不在の世の中にしてしまふのではないだろうか。

教化者は「自信教人信」でなければならぬと謂われるが、自信を確立することは、極めて厳しく、極めて難かしい。だが自策自励して精進勤修しなければ、遂に達成は絶望になつてしまふ。

教化の話材や話術の前に自ら念仏者の道を構築しなければいけない。信仰の道の構築は自らの手足によつてやる以外にない。一挙手一投足「身業」説法の重要性の指摘「が構築への歩みである。

未希の育つた環境と我々の成人する条件には残念ながら大いなる距りのあるを感ずれば猶更である。

信仰に於ける不可欠の要点は、他の如何なる者の成果の到達点をも、それを自らの出発点として芽生えないし、育たないと痛感する。自らの心を折伏し、摂受するところに信仰が息吹くものと信ずる。

祖母の思い出から

曾^そ田^だ文^{ふみ}雄^お

(広島文教女子大学教授)



一

「すこしのことに、先達はあらまほしき事なり」とは、『徒然草』五十二段に出る吉田兼好のことばです。念願の石清水八幡宮にやつとのことと詣でたものの、先達を欠いたが為に、男山の麓にある極楽寺とか高良神社を拜んだだけで、肝心の本社には参詣することなく帰ってきた法師の話を綴る段の末尾に評された文です。ここにいう「先達」とは、いわゆる案内人を指します。

筆者の日常勤行にも、先達がおりました。祖母がそれです。毎朝夕、筆者を伴って本堂に上り、香偈・三宝礼に始まる勤行を唱えたものでした。

筆者の幼稚園前後から小学校四・五年にかけての数年間でしかなく、大学一年の折亡くなったのでしたから、まずは短い一時期のことだったと申せましょう。けれども、傍らで、覚えるともなしに聞覚えた勤行が今日の基礎をなしていることに相違ありません。

一人立ちできるようになってから、父が唱

える勤行を耳にし、母の里へ行った折、祖父の江上秀静が弟子達と御勤めするのを聞いては、当然のことながら、祖母の御勤めも同じであったことに改めて感心したものでした。

強いて違う点を挙げるなら、祖母が上げた勤行のうち、「三唱礼」のところは、「父達の場合だと、普段には「三身礼」を唱えていたこと位だったでしょうか。他には『一枚起請文』が、「ただ一向に念仏すべし」のところでお終いになっていたのが印象に残ります。

『一枚起請文』については、御恥しいこと乍ら、最近まで、どうして「大師在御判」の最後まで唱えなかったのか、理由を知らませんでした。ところが、そのように、「為証以兩手印」以下を欠く写本も存すると知り、やっと合点が行きました。

その『一枚起請文』には「南無阿弥陀仏」が二か所に出てまいります。父方の祖父の兄弟子、桑門秀我大僧正が書かれた『一枚起請文』がかなり伝わっており、軸装されたもの

が檀家の床に掛けられてあるのを、棚経の折などに、屢々目にします。

それを見るに、「南無阿弥陀仏」が丁度真中にうまく来るよう按配された軸もあれば、右上方に扁って不釣合いになったものもあります。

その原因が、右述した二種類の写本に拠る違いに発していたのでした。「大師在御判」までで終る文章全部を記した軸となると、「南無阿弥陀仏」の位置は、全文章の半分より前に、かなりずれて置かれることになり、どうしても不均衡をまぬがれません。

黒谷の金戒光明寺では、来春、三上人遠忌を記念して、これの原本が拝観できるとのこと。斯様な絶好の機会を何とか生かしたいものと考えこの頃です。

二

これも幼稚園か小学校入り立ての頃だったかと思えます。日射しのまだ強くない初夏の

昼前。日曜だったと記憶します。祖母は、茶飲み友達と連立って氏神様に参りました。婆さん子の筆者が御伴したこと勿論です。

当時は、荷馬車が時折行き交うばかりの、自転車さえ珍しい田舎道。大人が並の歩度で十五分足らずの距離を、汗をにじみ出る気候でもなし、ゆっくり歩いて行きました。

急な石段を昇り、拍手を打っていると、祖母が顔見知りの神主さんが出て来られ、御神楽を上げてくださいました。御幣担かたぎ気味のあった祖母は、「今日はきつと良いことがある」と大層喜んだことでした。

帰り道のこと。国鉄と電車が併行して走る踏切りに差しかかると、蛙の鳴声がします。それも少々な数らしくなく、雨には縁遠い真昼間に、おかしいこともあるもの、と話しながら歩を進めました。

踏切りを越えたところは、最近埋立てが進んでいた区画で、田んぼが次々に消えようとしている場所でした。休日のこと、人影もあ

りません。僅かに残る田には、残り水が昼の日射しを受け、きらきら輝いておりました。

そこに、よくもこれ程にいるもの、と驚くばかりの、蛙の大軍が鳴き交していたのです。而も、それらは、只単に鳴くばかりでなく、二つの群に分れて対立し、夫々の群の中央には、ひときは大きな蛙が陣取って、小蛙を従えているではありませんか。

小蛙達は、双方の陣から何匹かずつが進み出て、戦を交えているのです。傷ついたのか、弱っている蛙、それを助けて味方の陣へ引返すのもおります。

茶飲み友達の御婆さんは、祖母よりも年上なのに初めて見たといっていました。祖母は、以前にも出くわしたことがある由、一つ一つの状況を説明して呉れました。

今にして思えば、齒さえ持たぬ蛙が、どうして相手を傷つけ得たのか、体当りでもするのやら、また傷ついた蛙をどんな具合に助けて戻ったものか、その辺のこと迄は、記憶に

さだかではありません。

しばらく見ていましたがに戦は仲々終りそうになく、間もなくその場を離れました。

家に着いて、小僧さんや寺男に話しましたところ、早速自転車を走らせて飛出しました。間なしに帰って来ていうには、あの近辺には蛙一匹見かけなかったとのこと。

あれ程の大軍が、ものの十分余りで消え失せたとは、こちらも聞いて呆れるばかりでした。それは、もの憂い初夏の白昼夢だったのでしょうか。一人ならず三人も証人を持つ激戦だったことに間違いありません。

三

『古今著聞集』巻二十には「寛喜三年夏高陽院の南大路にして蝦合戦かへるの事」が載ります。表題の地に設けられた堀に、数千の蛙が敵味方に分れ、くい殺されようが後から後から集まって来て戦った。ある人が蛇を投入れたのに、一向に恐れることなく、かえって蛇

の方が忽々に逃げ出した、と記します。

また、『狂言鶯蛙集』には、狂歌、

かけ引も苗代時の声あげて

水ぎは立ちし蛙がっせん

が引かれ、『紅梅千句』にも、

のどやかにけふの軍をやめよかし

(政信)

何にかへるのなきちからわざ

(長頭丸)

なる連歌も見られます。更に『親長卿記』では、春日大社における蛙合戦を語り、「条々希代事也」と結んでおります。

これらに対して、『日本国語大辞典』を開くならば、「かへるいくさ」の項に、

蛙が群集して、争って交尾すること。

多くの蛙が戦っているさまに似ているところからいう。

と説明されてあります。

この辞典は、その作成に当り、筆者も手を貸した一人ですから、けなしたくはないもの

の、一体、この項の執筆者は、それが群婚だという証拠を握って記したのでしょうか。先行辞書にひかれていなければ幸いです。

『古今著聞集』は、中世の説話集です。「著聞」とある以上、他人からの聞き伝えを並べた中には、奇想天外な記事も交っておりましょう。また、狂歌や連歌といえ、と角和歌に比べては、文学度の低い作品のように受取られがちです。

ではありましようが、その程度の理由から、現代の辞書なるもの、わたくし達の先輩が苦勞して書残して呉れたものを、常識では考え難いものとして、安易に抹消し去っていいものでしょうか。

四

この蛙合戦に関する限り、前節「二」に記した目撃に誤りはなく、明らかに筆者が経験したことなのです。親長卿などの、蛙合戦を書留めた先人の名誉の爲にも、筆者は生き証

人として、その事実を証言いたします。

わたくし達は、科学万能の時代に生きる者です。爲に、見たり聞いたりする出来事に対しては、科学の生んだ知識なるものを働かせてこれを判別し、つじつまが合わない限り、事実として受入れないよう教育されております。

しかし、どうでしょう。果してわたくし達が口にする知識なるもの、事相の限々までに行き届いた、申し分ないものといえましようか。尺度が狂えば、事は逆転さえします。そんな、いわゆる常識だけで過去のすべてを計ることは許されません。

古人が信じた「夢」の如き、それへの信頼度たるや、今日の予想を遙かに越えたものでした。「夢は正夢」なんてものではなかったのです。かの二祖の出合いも、深く信じられる基盤が当時の人々の内に具わっていたからこそ、画にも描かれ、永く受継がれて来たのです。「昔」に対しては、もっと素朴な心で向いたいもの、と考えます。

間断しない念仏

村瀬 秀雄



「行は一念十念なおむなしからずと信じて
無間に修すべし。一念なおむまる。況んや
多念をや」

念仏往生の本願には乃至十念と説かれ、願
成就の文には乃至一念と説かれているので、
十声一声の念仏を唱えた者でも極楽往生でき
ることに間違いがない。ただし何れの場合で
も乃至と説かれているので、生涯を通して念

仏を唱えていた者から十声一声の念仏を唱え
た者に至るまで、すべて往生できるという意
味である。ある人が法然上人に問うた。

「善導大師は『十声一声の念仏を唱えた者で
も必ず極楽往生できることを素直に認め、深
く信ずるのである』と説いています。しかし
同時に『念々に捨てることなく念仏を相続し
ていれば必ず極楽往生できる』とも説いてい
ます。この二通りの文の何れによって念仏を

唱えればよいのでしょうか」

上人は答えていった。

「善導大師が十声一声の念仏で往生できると説いているのは、念仏の功德を信じる心の持ち方を説いているのである。念々に捨てることなく相続して唱えたと説いているのは、念仏の唱え方について説いているのである。このように大師は一声の念仏で必ず往生できると信じて、生涯を通して相続して念仏を唱えるように勧め給うたのである」(十二問答)

十声一声の念仏と聞くと念仏の数に拘泥し勝ちであるし、生涯を通して相続するといわれると念仏を唱えていた年数が気になる。しかし上人はいった。

「阿弥陀仏の本願は念仏を唱えていた年数が百年でも二十年十年でも、あるいは五年四年であつても、あるいは二年一年でも、あるいは七日一日でも、あるいは十声一声の念仏でも唱えれば必ず往生させると誓い給うたのである。このように信じて南無阿弥陀仏と唱え

れば、念仏の数や日数に関係なく仏は必ず来迎し給うのである。つまりは往生したいと願つて念仏を唱え始めたならば、その時からこの世の寿命を終えるまで唱え続けているのである」(浄土宗略抄)

阿弥陀経に一日乃至七日にわたつて一心不乱に念仏を唱えるように説いているが、善導大師はこれは七日七夜にわたつて心無間に念仏を唱えることであると説いている。しかし上人は次のようにいった。

「善導大師は七日七夜にわたつて絶え間なく念仏を唱えるようにと説いている。しかしこれは明日かも知れない極楽往生という大事なこと欠かさぬように、今日のうちに励むのであると思つて、心をこめて唱えていなくてはならない」(常に仰られける御詞)

絶え間なく念仏を唱えるというのは無間修のことであつて、恭敬修、無余修、長時修とともに四修の一つである。無間修は間をおかずに念仏を唱えることである。

日時と場所を定めて修める念仏会を別時念仏という。上人は次のように説いた。

「時には別時の念仏を修めて心をも身をも励まし、不足になり勝ちな念仏の功德を整えみたすべきである。日々に六万通、七万通の念仏を唱えていれば十分に足りているのであるが、人の心情はいつか目に慣れ耳に慣れて精を出して唱える気持が薄くなり、毎日の明け暮れの慌しさに心が落ちつかなくなって、つい念仏を疎略に唱え勝ちになる。この気持を直して念仏を唱えるようにするために、時には別時の念仏を修めなくてはならない。だからこそ善導大師は七日七夜の別時念仏を修めるように勧め給うているし、先徳の恵心僧都も修行の方式を詳しく説いているのである」
(念仏行者訓条)

毎日唱える念仏の遍数を予め定めておき、その通りに唱える念仏を日課念仏という。ある人が上人に問うていった。

「毎日の念仏に念珠を早く繰りながら六万、

十万と唱えるのと、二万や三万であっても念珠を一つ一つ確かに繰りながら唱えるのとでは、何れがよいのでしうか」

上人は答えていった。

「凡夫の習いとして毎日の念仏を二万、三万ときめておいても、法の通りに唱えることが難しい。ただ少しでも多くの念仏を唱えることに越したことはない。そうすれば念仏を相續して唱えられるからである。必ずしも数をきめておくことが大切でないが、ただ常に念仏を唱え続けるようにするためである。数をきめておかないと怠ける因縁になるので、数をきめて念仏を唱えるように勧めるのである」(百四十五箇条問答)

上人の日課念仏は七万遍であったとして、次のようにいった。

「源空は大唐の善導大師の教えに従い、わが国の先徳恵心僧都の勧めによって、念仏を唱える勤めは毎日六万遍であった。死期が次第に近づいてからは、更に一万通を加えて一日

に七万遍の念仏を唱える行者になった」(聖光房に示されける御詞)

聖光房弁長が上人の室に入ったのは建久八年(一一九七)であり、上人は六十五歳、弁長は三十六歳のことであった。上人はその年に病氣にかかり、翌年の四月八日に没後遺誡文を認めているので、自ら死期が近づいたとして日課念仏を七万遍にしたのはこの頃のことであつたであらう。

むかし波金璃という国王がいて、国内に盜賊が多く、疫病が流行して困っていた。釈尊は国王に教えて菩提樹の実を百八個つなげた数珠をつくらせ、南無仏陀、南無達磨、南無僧伽と唱えさせた。もし唱えること百万遍になれば百八煩惱が滅せられ、無上の功德が得られると説き給うた。わが国で百万遍の念仏が悪疫退散、無病息災のために修められたのは、この木楼子経に説く数珠の縁起に一致するものであつた。百万遍の念仏は何人かの僧俗が集り、大型の数珠を手繰りながら唱える

のである。かりに二十人が一緒に念仏を唱えていて、一人が五万遍を唱えると百万遍の念仏になるという。このことは他の人の念仏の声を聞いていると、自分が唱える念仏と同じ功德が得られると信じられているのである。ある人が上人に問うていった。

「臨終に必ずしも仏像を拝んだり、五色の糸を引かなくてもよいでしょうか。また自分で唱えなくても、他の人が唱えている念仏の声を聞いているだけで極楽往生できるのでしょうか」

上人は答えていった。

「必ず糸を引かなくてはならぬということはない。また仏像を拝んでいなくても、念仏さえ唱えていれば往生できる。また他の人が唱えている念仏の声を聞いているだけでも往生できる。ただしそれは本願と念仏の功德をよくよく深く信じている人の場合である」(百四十五箇条問答)

臨終に自分が念仏が唱えられなくても、信

心が深い者であれば傍で唱えている念仏の声を聞いているだけで往生できるのである。もつとも信心が浅くて本願を心から信じていない者が念仏を唱えていても、往生できるかどうか判らない。証賢は次のようにいった。

「この世のどこを見ても貪欲と我執によって罪深いことを行っている者ばかりである。哀れ悪道におちてしまえば、鳥の巢に置きざりにされた卵のように、飛んで逃げられない身になってしまふ。それなのに後世のことを少しも考えていないから、どのような罪でも心の向くままに積み重ねながら平気でいられるのであろう。せめてわれ等が唱えている念仏の声をその人に聞かせることによって、少しでも人々の罪を軽くすることができるのであるまいか。これこそ仏縁を結ばせるために並々ならぬ方便ではあるまいか。念仏を唱えれば、その声を聞く者の罪を軽くし、われ等自身の罪もまた滅せられる。念仏には重ね重ねの利益があるわけである」(西要抄)

阿弥陀仏は十声一声の念仏を唱えた者であっても往生させると誓い給うている。それなのに日課念仏を数多くにきめて、絶え間なく唱え続けてゆくのは自力の修行であるまいかと考える者がいる。特に百万遍の念仏は百万遍の苦行とさえいわれているので尚更のことである。しかし唱える念仏の数の多少によって、自力と他力の区別があるわけでない。法然上人は次のように説いた。

「念仏を数多く唱える者は自力の修行に励むのであるという者があれば、これまた何んともいいようのない驚き入った誤りである。僅か一遍二遍の念仏を唱えるにしても、自力で往生すると考えている者ならば自力の念仏である。毎日千遍万遍の念仏を唱え、百日千日昼夜を分たずに励み努めたにしても、偏に仏の本願力を頼みにして他力を仰いでいる人の念仏は、その一声一声が即ち他力の志仏なのである。真実の心から本願を深く信じて極楽往生したいと願っている者が、毎日毎日時

々刻々に念仏を唱えていても、すべて本願力を仰ぎ、阿弥陀仏の慈悲を頼みにする心で唱えるのであるから、些かも自力の念仏と考えてはならない」(念仏行者訓条)

そしてまた上人は次のようにいった。

「念仏を唱えるのに心が進まない人は計り知れない大きな宝を失っている人である。心から進んで勇むようにして念仏を唱える人は極構往生し、最高の悟りを開くことができる人である。必ず心から往生したいと願って、念仏を相続しなければならぬ。自分の力では到底救われる筈がない罪人であっても、念仏を唱えることによって仏の本願力に乗じて極樂往生できることを他力の本願とも、超世の本願ともいうのである。本願の意味を知らない人は自分の才能や修行を考えて往生できないであろうと疑うので、結局は往生できないのである。修行に精進したり、学問を積んだ者が念仏を唱えるからこそ往生できるのでありと考えたり、明けても暮れても罪ばかり

つくっている者や、文字一つ読めない無学の者では念仏を唱えても往生できるかどうか判らぬと疑う者がいる。これらの者は念仏往生の本願が善人でも恵人でも同じように往生させる誓い給うていることを知らない人である」(禅勝房に示されける御詞)

念仏は仏助け給えと願って唱えるのであるから、数多く唱えればそれだけ丁寧に願って他力を仰いでいるわけである。証賢は次のようにいった。

「念仏を深い穴に落ちた子供が助けを求める声に喩えた学僧がいる。幼い児がいに泣き叫んでも、自分の声の力で穴から出られると思っているわけでない。ただ泣き叫ぶ声を父母に聞いてもらって、早く助けにきて欲しいと願っているのである。念仏を唱える時に心で願っているのも同じである。いか程数多くの念仏を唱えることに励んでも、ただ繰り返して仏に訴え、仏の力で往生させて欲しいと願っているだけである」(西要抄)

(終)

昭和62年度版

浄土宝暦

—三上人遠忌慶讃記念号—

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和62年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

◎なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

.....お申込み.....

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替)東京8-82187

寄稿

唐沢山阿弥陀寺参詣記

築地泰賢

(築地商會社長)

草も木もみ光に照りけふもまた

大みいのちに生くるうれしさ

観道上人は明治二十年(一八七八)佐賀県に生れ
若年一日虚空に輝やく光を視し豁然として覚醒入
信み命を如来に奉供してひたすら念仏世に真生の
大道を説き弘めたまふこの地は幽邃なるなる山嶽
を負いて水清くよろづの草木雲間の磨崖になべて
是仏のみ命遍満す古来仏法ゆかりの当山に上人の
教を受けし同志は東西より結衆をかさね師を囲み
て深き法縁をむすべり茲に真生道の宣揚を悠々に

冀ふ法弟同友の敬慕の心をあつめて師恩の深重を
後世に彰さんと悲願を建つ

信州唐沢山阿弥陀寺参道の中腹に建つ土屋観道上
人の頌碑の御道詠と銘文である。

唐沢山は念仏の霊場として世に知られる靈山であ
る。その沿革をしるせば、「当山は今から約三百七
十六年前、文禄四年(一五九五)高島城下下桑村(上
諏訪)の郷人、河西浄西という念仏者が六十一歳の
折開基し、後四年、慶長三年尾張の国海辺の里人、

彈誓上人が諸国修行の途、諏訪を訪れ、開山となられたのである。上人は此の地に、五ヶ年間滞在せられ、当山の外飯田の阿弥陀寺、大町の彈誓寺、索筑百瀬の昌念寺、雲上院、松本の念乗寺等の諸寺を開き、後武洲を廻り、京都洛北大原の里古知谷に光明院阿弥陀寺を開き、慶長十八年五月、其の地にて還化せられた。寿算六十二……」と伝えられている。

庫裡には正面に山下現有上人の「明照」の額が掲げられ、山崎辨榮上人の遺影前に同上人が画がかれた観音像が飾られて居る。内規は厳しいものがある。

一言わずかに出れば一仏を失す

見仏のみ是れ急是れ要

雑談を禁じ常憶念

息をする忽れ念ぜぬ時は

まさに禅道場を思わしめるものがある。かつて私がみた禅道場にはこれら貼紙はなかった。」

聖きみくに

聖き啓示を被むりて
清きみ空は朗らかに
雲に聳る高樓は
瑠璃寶石の莊嚴の
七の宝の池みれば
金の沙はきららかに
宝の樹に玉の枝
みそのに遊ぶ樂みは
天つ乙女は雲を分け
ひびける音の樂しは
日々に六度の花の雨
きしの山吹宛がらに
三昧の筵に座を占て
烏瑟の緑は天にこい
金の相好妙にして
巍き威儀は嚴そかに
菩薩は妙たる法身に
如来を繞りし装ひは
三摩耶の窓を開くれば
常世のみ国現はれぬ
金銀また真珠
照り輝やくこと窮みなく
八の功德の水みてり
清める面にぞ照り徹る
金の花は咲きにほふ
無為の都の春ながし
奏づるしらべ妙にして
身のをき処も覚ほえじ
金の庭にぞふりつもる
何の色ぞとまがふらめ
仰ぎ奉つれば弥陀尊
五山の毫光かがやける
月のみ顔は円かなり
万の徳は満みてり
おのゝ威徳備はりて
雲の月をかこむ如と

無為泥洹の境には
大悲心に薰じてぞ

長閑さ有無を離れにき
分身利物の極なけむ

〔如来光明記拝像〕聖歌

山崎辨栄上人（一八五五—一九二〇）の墓参もなつかしい。

参道をめぐりつつ「聖きみくに」斉唱しながらの墓参である。徳本行者、彈誓上人のお墓が並ぶ。「七の宝の池みれば、八の功德の水みてり」と、脳裡に浮んでくる「阿弥陀経」の一節、

又舍利弗・極楽国土・七重欄楯・七重羅網・七重行樹・皆是四宝・周市围绕・是故彼国・名曰極楽

又舍利弗・極楽国土・有七宝池・八功德水・充滿其中・池底純以・金沙布地・四辺階道・金銀瑠璃・玻瓈合成・上有楼閣・亦以・金銀瑠璃・玻瓈・赤珠碼瑙・而嚴飾之・池中蓮華・大如車輪・青色青光・黄色黄光・赤色赤光・白色白光・微妙香潔・舍利弗・極楽国土・成就如是・功德莊嚴

まさにこの一節は、少年の頃増上寺会館に於いて、渡辺海旭先生によって講ぜられた经文である。昭和三年、私は十四歳の少年であった。

「無為泥泥の境には長閑さ有無を離れにき大悲心に薰じてぞ分身利物の極なけむ」——音唱終わる頃は感無量にして涙がこぼれる。今、弁栄上人の目前に立とうとする私。師（入江寿禅）に代りお香を献じようとする私。唐沢山籠山の念仏が、私の唱える南無阿弥陀仏が、師の念仏の声となった頃は心が統一されはじめた時である。芝増上寺や小石川一行院に於ける念仏も亦同様であったと思う。

念仏期間中（七日間）の朝、昼、夕の休憩時には必ず鐘楼に登った。

願此鐘声超法界 願わくばこの鐘声法界を超へ

鉄围幽闇悉皆聞 鉄围幽闇悉く皆聞き

三塗離苦生安養 三塗苦を離れ安養に生じ

一切衆生成正覺 一切の衆生と（共々）正覺を成ぜ

んことを

梵鐘の清澄な音響は峰を越え、谷を越え、あちこちに流れる。まったく、心洗われる思いである。

洪鐘は叩くを待ち 幽谷は声に応ず

洪鐘は響くが如く 扣くを待つて鳴る

念仏亦然り 称へざれば仏聞き給わず

早朝（午前四時）の念仏以外朝、昼、夕の念仏は称名のうちに全員庫裡に集合し終るを待つて道場（本堂）に入り、それぞれの行事に移る。短時間ではあるがこの高樓（庫裡西方諏訪湖を望む）の念仏こそは行中最も印象深いものであった。太陽の沈みかけた日没の念仏、緑したたる樹林に対する朝の念仏、渚水をたたえる諏訪湖を見下しての昼の念仏。それぞれ日想観、宝樹観、宝池観の思いで念仏を唱える事が出来た。生涯忘れる事の出来ない体験であった。

鐘樓のほとりに靈泉岩間より流れいづる彈誓上人の「御加持水」がある。

本寺開山、彈誓上人は天文二十一年（一五五三）、佐渡相川より諏訪唐沢に移り一字を建立、毎日念仏三昧にして世間の人達多くその徳を慕い、上人に帰依したり。

上人ある時衆生済度の祈念のうち鐘樓のほとりをつきたるところ、清冽なる清水湧き出し、参詣人この水を吸みて家に持ち帰り、長命の水として称へ、爾後今日に至るも近隣諸国より汲みに来る人引きもきらず、有名なり。

当唐沢法国山阿弥陀寺に於いては夏期には大正八年以降、真生会の修養行時、光明会（弁榮上人の創立）の別時修養念仏が行われて、本年はその第六十六回目に当るのである。参加者七十余名。全国より参集の念仏者達で大木魚につられて朗然たる念仏を唱和した。最近はや、大正大学伝道学夏期結集等が行われている。

唐沢山阿弥陀寺沿革中に約三百七十一年とあるがこれは沿革作製の時であって、昭和六十一年より逆算すれば三百九十一年前となる。

み 仏 と と も に

＝20＝

—緯書学への道—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

学問への道は、決して易しいものではない。特に或る研究で自からの道を切り開き、これによって学界に立っていかうとする為には、たゆまぬ努力と学運に恵まれなければ、これを成し遂げることができない。微力な私などには、とてもそうした力はない。そして、今日曲りなりにも学人の一人として、特殊な研究を進めながら学界に立っていけるのは、よき指導者に恵まれ、よき協力者を得たからであった。

私には、二人の偉大なその道の恩師がある。一人は、私を文理科大学に招いて下さった、当時の漢文学研究室の主任教授である竹田復先生であり、もう一人は、私が文理科大学に助手をしていた頃、竹田先生の後任として着任せられた内野熊一郎先生である。両先生とも今日もご健在で活躍せられ、竹田先生はもう百歳にも近く、内野先生も八十の坂を越えられた。この二人のみ仏のご長命は、私にとって、この上ない幸運といふべきであろう。

竹田先生は、ご専門は中国文学であったが、学識は深く、広い視野に立った焔眼の持主でおられた。或る日先生は、

「安居君、君は宗教にも関係があるから、中国の予言思想である緯書というのをやってみないか。かつて安井小太郎先生が、これは難しい学問であるが、誰かやらねばならぬものであると言っておられたが、君どうかね」

とお話があった。かつて竹田先生が恩師から言われたことを、弟子である私に助言されたものであった。その当時、私は緯書がどのようなものであるか、殆んど知らなかった。しかし、自分の研究にも少し行き詰まりかけていただけに、先生のご指導は大いに心動かされた。それは寒い冬の日の夕方であったと覚えている。当時はまだ暖房もなく、炭火をかきまわしながら、先生と火鉢を囲んでの話の中でのことであった。

「先生、私、それをやってみたいと思います」

私は、先生の眼鏡越しに輝く眼をみつめながら、きっぱりとそう答えた。先生は「うん、うん」とうなずいて

おられた。それから私は、緯書に関係する書類をあさり、研究論文を探した。しかし竹田先生がいわれたように、殆んど研究がされていない為か、研究論文らしいものは殆んどなかった。ただ中国の陳槃博士がこの方面の成果を数多く「中央研究院歴史語言研究所集刊」に発表されており、これはその後の私の緯書研究に大きな力となった。

更に清朝の学者の蔣清翊に、「緯学源流興廃考」というのが静嘉堂文庫にあることを知り、暇を見てはこれを文庫に行つて筆写した。当時はコピーなどはなく、こうした資料は書き写す以外に道はなかった。インクペンで写すことは許されないので、ノート二冊に鉛筆で写した。これは今尚私の座右にあり、貴重な参考資料となっている。今日では複製本ができているが、多くの書き入れのあるこのノートは、私の緯書研究の歴史にあっては、貴重なものの一つである。

更に、幸いなことにこの頃学生の中に、やはり竹田先生の指導を受けて、緯書を卒業論文のテーマにしている人がいた。これ以後三十年来、ともに緯書研究を共にすることになった現駒沢大学教授の中村璋八氏である。私



——陳槃先生ご夫妻と筆者——

は中村氏から緯書のことをいろいろ聞くと共に、彼が苦
勞している問題点をただした。

緯書は前漢から後漢にかけて流行したもので、今日で
は一般的には讖緯しんゐといわれ、中国の未来予言書とされて
いるが、一面ではこれは、漢代思想研究には欠くことの
できないものであつて、漢代儒家思想の特性を形成する
もののなのである。漢代では天人合一思想を基調とした神
秘思想が流行したのであるが、これによって原始儒家思
想を見直そうとしたのが、緯書であつた。まだ今日では
緯書学として確立されているわけではないが、それだけ
に漢代思想研究には欠かせぬものであると共に、それ以
後の儒家思想研究にとつても、見逃してはならない思想
なのである。

とかく今までは、未来予言の書として輕視され勝ちで
あつたが、今日ではこの方面の研究が注目されるようにな
り、国内外の学者が、これを手掛けるようになってき
た。そして、こうした傾向に寄与することのできるよう
になったものの一つに、私と中村氏とでいまも続けてい
る『重修緯書集成』の刊行がある。

中村氏に当初緯書のことをいろいろ聞いた中で、緯書

研究を最もはばんでいるものの一つに、資料整理の不備ということがあった。緯書は前にもいったように、漢代に流行したものはあるが、未来予言書ということもあって、革命と結びつきやすかった。そんなこともあって、幾度かの禁圧に遭い、隋の煬帝によって徹底的に禁圧され、この世からこの書は姿を消したとまでいわれている。ところが、不思議なもので、中国では、こうしたものは何処かに隠し残され、或いは部分的ながら諸書に引用されて残っている。これを佚文いっぶんというのであるが、これが相当残っており、明、清の学者がこれらを集めて輯佚書として整理している。代表的なものでも十種類ほどある。

しかし、これらは体系がなく、重複したものや、未収録のものがあって、緯書の全体像をつかむには、不十分である。こうしたこともあって、私は中村氏と二人で先ず緯書の整理から始めることにした。各項目に従ってこれをカードに取り、それぞれを比較校合しながら整理した。カードも万を数える程になった。整理したものをカードにして置くだけでは見にくいので、これを項目毎にガリ版刷りに油印することにした。これが当初の『緯書

集成』で、六卷八冊の大部なものになった。このガリ板刷りには、当時私が教えていた大正高等学校(定時制)の教え子で、その頃、アルバイトにガリ板刷りをしていた海部道弘君や戸野倉信道君、或いは蓮谷由紀子さんなどに依頼した。われわれの研究を助けてくれたみ仏たちである。

海部君はそんな縁もあり、私の弟子となり、雑誌『浄土』の編集や販売にも協力してくれることになったが、不幸短命にしてこの世を去った。昭和三十九年一月二十三日のことである。私は毎朝貴光寺で読経をしているが、過去帖に彼の命日を迎えるたびに、思い半ばに過ぎるものがあり、心から冥福を祈っている。彼の作ってくれた経本台は、今も私の座右にあって、私の研究を助けてくれている。

戸野倉君と蓮谷君の方は、又不思議なことで、これが縁となって私が仲人となり、幸せな結婚をしたのである。真言宗豊山派に属しているのであるが、長岡の小寺の住職として活躍している。人生、何が縁になるか分らないものである。

話は少しそれたが、『緯書集成』はそんなわけで、油

印本があつたが、少し余分に刷って書店に並べてもらったところ、飛ぶように売れ、外国の大学までが買い込んだ。こうした資料が無かったからである。かつて私が欧米に留学した時、ケンブリッジ大学の図書館に緯書コーナーがあり、油印の『緯書集成』が並べられているのにびっくりしたことがあつた。油印である為、校正も思うにまかせず、誤字脱字も多かった。また句読の誤りもあったりでこの書の改訂を、中村氏とすることにした。幸い文部省の研究助成・出版助成も得ることができて、漸く本格的なものとして世に出したのが、『重修緯書集成』で、現在六冊まで完成している。当初出した「詩・礼・楽」の部が、昭和四十六年であるから、正に十五年かかっている。あと「春秋の部」二冊出さねばならず、今中村氏とともに鋭意努力中である。

毎月一回、中村氏に私の家に来てもらい、二人で読み合わせたり、切り貼りをしたり一日やっている。三年に一冊の割というのが、その進行度であるから、昭和六十二年度に一冊出すとして、次の出版は昭和六十五年度である。中村氏は私より八才程若いのでとも角として、果して私はこの完成を見られるかどうか、あやしいもので

ある。しかし、これだけは何としても完成して死にたいと思っているが、み仏は果して私にそれだけの人寿を与えて下さるであろうか。

いずれとするも、今日、緯書研究者としての私が存在するためには、多くのみ仏たちの力があずかってきたのである。まだここには書き切れない数々のみ仏たちが、こうした私の緯書への道を助けて下さったわけで、有り難いという一語につきる。

恩師のもう一人である内野熊一郎先生については、紙面も尽きたので次回にゆずることとして、とも角、一介の学人としての歩みの中でも、数多くのみ仏たちが、力となっていることを、今更のように感ずるわけである。それとともに、今日まで、こうしたみ仏たちに助けられて、学問の道にたずさわってこられたことを、改めて深く感謝せずにはいられない。

(つづく)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（十四）

—洛陽（二）—



木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

（隨筆家）

洛陽賓館は十階建の近代建築である。正面は道路を隔てて、樹木の豊かな大きな公園に面している。部屋の窓から眺めると、街の中心部にはビルが建ち並んでいるが、郊外に行くにつれて低い土屋の家並となり、中国のどこでも見られる中都市の姿である。

洛陽の落日を見るにはまだかなり時間がありそうに思えたので、荷物の整理を始めたのが間違いだ。トランクの中は無茶苦茶で、脱ぎ捨てた物は一応ビニール袋に入れて別にしておいたが、隙間を探しては詰め込んだため、そんな袋を一つ二つ取り出すと、後は收拾がつかなくなってしまった。ベッドの上に中身を払げて思案していると、どこからか藤原さんが帰って来られた。

「ほう、やっていますなあ。私もやらんといかんのだが……。まあ一杯いかがです、売店に缶ビールがあったので買って来た」

「おっ、青島啤酒ですか！」

「日本の物もあった。サッポロだったかな。でも、何もここで飲むことはない」

「そうです、そうです。それにしてもお初にお目にかかる缶ビール。それも青島啤酒とは。いよいよ
母原の都に來たって感じですね」

そうこうしているうちに、部屋の中が急に暗くなった。西空には僅かに残照があるだけで、しまつたと思つたが、後の祭りであつた。「あしたがあるさ」と口の中で呟いてみたものの、私は現代の洛陽の落日には、もうあまり期待していなかつた。「都門に立って西の方を眺めれば、一草一木も無い黄土の起伏……。その果てに日が落ちて行く。落暉は常に黄土の色を映して、黄色い光芒を放つていた。……と俺がイメージしたのは、光武帝が後漢を建てた頃の洛陽なんだから」

洛陽は西歴七七〇年、周の十三代平王が北西の異民族犬戎に長安を追われ、洛邑（洛陽）に遷都して以来、後漢、魏、西晋、北魏と五代の王朝がここに都を定めている。中原に覇を唱えるには格好の地だったのであろうが、北魏の後、ここを都とする強力な王朝は出現しなかつた。中国の政治の中心が、地方の時代に入つたということかも知れない。西晋の末期、五胡十六国が次々と興り、また次々に淘汰されて、四三九年北魏の華北制圧を以て、北朝の北魏と南朝の宋に統一され、世に謂う南北朝時代を迎えるのであるが、平城（大同）に都した鮮卑族の北魏と建康（南京）に拠つた漢族の宋とは、文明にも落差があり、仏教に対する考え方も違つていた。北魏の太武帝は断固として仏教禁圧政策を採つた。しかし彼が死ねと、次の文成帝は仏教の復活を宣し、曇曜をして雲崗に石窟院を開鑿せしめたのである。以後歴代の皇帝も仏教を信奉したので、北魏の仏教文化は大いに栄えたが、四九三年、孝文帝は洛陽への遷都を強行し、翌年竜門石窟の開鑿を命じている。何故の遷都だったのか明らかでないが、漢文化の吸収に積極的だった北魏にしてみれば、中原に駒を進めるのは悲願であつたに違いないし、また南朝より優位に立つたと広く天下に知らしめるためには、洛陽遷都を強行しなければならなかつたのであろう。洛陽の地名の由来は、洛河の北岸に位置する陽の当たる場所ということ

らしい。洛河に並行するように、外側を南から東に湾曲しながら伊河が流れている。竜門石窟はこの伊河の西岸の（一部は東岸にもあるが、これは唐代の物）丘陵に掘られている。北魏が一番警戒したのは、南朝の武力侵攻であった。北魏は河を洛陽の防衛線としたのではなかったか。伊河の線を突破されても、洛河で防ぐことが可能だからである。更に伊河西岸の丘陵に石窟を掘り、岩壁に仏像を彫って、華麗な仏教文化を誇っていた南朝を牽制したのでは……。

九月十二日、快晴である。日が昇ったばかりというのに、前の公園にはすでに大勢の人が集まって、剣舞の体操をしている。四歳位の子から十二歳位までの女の子だけの十四、五人の集団が、長髯の老人の厳しい指導の許に、真剣な面持ちで拳法に似た体操をしているので可愛かった。ここで私は奇妙な老人に出会った。その小柄な老人はよれよれのレインコートを着て、首から携帯用のラジオをぶらさげ、手に紙袋を持ってぼんやり立っていたが、私が通りかかると、「日本の方ですか」と声をかけて来て、「国慶節には、青年の船で、日本から大勢の若者がやって来る。いいことです」と、独り言のように呟いた。頬に刻まれた深い皺、白いまばらな無精髭、ボサボサの頭髮……、こんな顔をした脇役の俳優がいたなと思ったが、名前を思い出せないままに、私はまじまじと老人の顔を見つめた。老人と言っても、せいぜい私より十歳位上であろうか、ひょっとすると同年輩かも知れない。口数少なく質問する老人に、私は私に判る範囲内のことは全部答えてあげたものである。「日本語、お上手ですが、どこで覚えられたのですか」と、多少ためらいはあったが、私は思いきって聞いてみた。なかなか巧みな日本語で、テニヲハの間違いもなく、濁音・半濁音も正確に発音していたからである。「中学生の頃、満州で……」としか、彼は答えなかった。そして「いい旅をして下さい」と言うのと、すうっと私から離れて行った。その背後姿に、私は日本人を見た。自分の意志で故国を捨てたのか、有耶無耶のうちに故国に捨てられてしまったのか、彼は正真正銘の日本人のようだった。

朝食もそこに、竜門行のマイクロバスに乗せられる。洛陽の青年ガイドは独断専行型で、客の思惑などは全く気にしないのである。竜門へは三十分程で着く。伊河は濁流滔々と流れる大河で、その左岸に掘られた石窟群はよく整備されていて、石窟公園と呼んでもおかしくない。丁度、朝食を済ませた観光客が殺到する時間帯だったので、渋谷原宿辺りの歩行者天国を彷彿させる混雑ぶりであった。驚いたことに、この岸辺にはあちこちに滾々と清水が湧き出しているのである。舗道の側溝を流れる水も清冽そのもので、目高に似た小魚が泳いでいる。伊河から僅か数十メートルしか離れていないというのに、この水の色の違いはどうだろう。人波に押されて石窟を巡る。竜門の石窟は北魏窟と唐窟に大別されるが、北魏窟では第三窟（賓陽洞）の大仏が、保存もよく美しい。唐の窟では月並なようだが、第十九窟（奉先寺洞）の摩崖の諸仏に目を奪われる。いずれもその国が隆盛を極めた頃、勅願で造営された窟であるから、結構な出来栄であることは言うまでもないが、殆ど立ち止まることを許されない状態で拝したから、私の印象は案外希薄で、むしろ路傍の面をそがれた仏とか、仏が消滅した仏龕の空虚さ、竜宮へ通じるといふ石窟の前の泉を泳いでいた小蛇のあやしい文様などの方が瞼に焼き付いていて、いまとなっては懐しい。一時間程して、対岸から竜門石窟の全容を眺めた時、先程の雑沓が嘘のように人影はまばらになっていた。我々は最悪の状態で石窟を見学したのであった。「時差出勤という観念が中国にはないのだよ」と誰かが言ったが、ガイドにその配慮があれば、我々はゆっくりと石窟を見ることが出来たはずである。悔やまれることではあった。

午後、洛陽市の東北東のはずれにある中国最古の寺、白馬寺へ赴く。後漢の初期、西歴六十八年に建立された白馬寺は地下に眠っているが、現存する白馬寺は、いつ頃ここう建てられたのか、貰ったパンフレットには書かれていなかった。何度も兵火に会った洛陽の街そのものがかなり移動しており、街衢は何層にも重なって地中に埋まっているのであるから、白馬寺の名前と再建された建物が残

っているだけでも良しとしなければならぬのであろう。それ程大きな寺ではない。煉瓦を積み上げて漆喰で固めた赤い楼門を潜って中に入ると、落ち着いた佇いは奈良辺りの古いお寺にいうので、違和感を感じなかった。大王殿だったか大雄殿だったか、大きな弥勒菩薩が破顔一笑して坐っておられたのが印象的だった。まるで、七福神の布袋様である。インドのエローラのジャイナー教の石窟にも、この弥勒様そっくりの像が祀られていたが、どちらもお金儲けにご利益があるというのが面白い。どこで、どんな訳があつて、弥勒様は朝鮮や日本で見られるようなたおやかなお姿になられたのであろう。建物の裏手は広い菜園になっていて、自給自足する寺本来の姿が垣間見られたのは思いがけない収穫であつた。門を出て、寺の東側に立つ石造の斉雲塔を見に行く。門前に屯していた土産物売りが一斉に走って、斉雲塔の前で我々を待ち受けたのにはびっくりした。十三層の斉雲塔は下から三層目あたりから上が修復されているが、修復された部分の細工は拙劣である。それにしても、これは何のための記念塔であらうか。

次に行った洛陽博物館は、黄河流域から出土した文物を、瀟洒な二階建の建物の五室に分けて展示している。第一室、原始社会。第二室、奴隸社会（夏、商、西周、春秋）。第三室、封建社会——（戦国、秦）。第四室、封建社会——（漢、魏、晋、北魏）。第五室、封建社会——（隋、唐、五代、宋）と時代別にまとめられてあるので、黄河文明を縦覧するには便利に出来ている。奴隸社会という表示がいかに中国らしい。ざっと一廻りしたら、どっと疲れが出た。第一室の土器の粗朴な形や文様を見ても、唐代の巧緻な細工物を見ても、蘭州の博物館で覚えたような感激はなかった。しかし、入口に飾られている唐三彩の駱駝はさすがに見事で、この駱駝のとぼけた顔をためつすがめつして、皆にんが出て来られるのを待つしかなかった。

十七時、落日を見る暇もなく、慌しく上海行の夜行列車に乗り込む。

（続く）

(読)(者)(の)(ペ)(ー)(ジ)

自 縄 自 縛



学生生活を終えるや、一年間軍務に服さねばならず入隊した。出身大学も夫々異なる者のみが集められていた班で過ごしていた間に、二名の得難い良き友を得た。不思議な出会いとは、こういうものかと思った。親しい、充実した交際が続いた。ところが日中戦争が勃発し召集され、一人は南支で、一人は中支で

戦死してしまった。

死は底知れぬ寂寥感、無常感をもたらすものであることを深く知らしめられた。

ご縁があつて現世に人間として生を受けたのだ。諸行無常の教えのとおり、あらゆるものは絶えることなく変化を続けていて同じ状態でとどまっているものはない。

吉^{よし}田^だ勇之助^{ゆうのすけ}

「老」そして「死」へと移っていく自然死とでも申す死、様々な形態で突然おそってくる不慮死がある。

美濃部前東京都知事の死が報ぜられた時、余りにも突然で而も実に安らかな、静かな臨終であつたのでおどろいてしまった。客観的には苦悶の様子が全く現われていない。

人の臨終には苦痛が伴うのか、無いのかは知ることとは出来ない。

死は必然的な、そして平等性のものだ。死を恐怖するこだわりは、生きている限りある。古木が朽ちて静かに倒れるように、「老」の到来で現世を離れていく、所謂自然死には心身に苦痛は無いであろう。

自らの知的な計らいにのみ執着し、自分を縛っている縄を自らほどかない限り、いつまでたっても、こだわりからは解放されまい。今生の御縁が尽きれば、生前の世界、大生命のもとの流れの中へ独り赴くのが死であると思っている。

なにひとつわからない死後のことにこだわっているので、全く愚かものと言える。

「こだわることのない人は、理法を知ってこだわることがないのである。かれには生存のための愛執、または生存の断滅のための愛執は存在しない」と『スッタニパータ』（八五六番）には釈尊のみ教えがある。

「すべてのものは無常であるから、汝等、怠ることなく努めよ」は、また実に感銘深いお言葉である。

常に心中で繰り返えし思い続けていく時に、おのずからこだわりの縄もほどけていくであろう。

往生を期して、決定の信をとることは大変な難事である。

「一丈の堀をこえんと思はん人は一丈五尺をこえんとはげむべし。往生を期せん人は決定の信をとりてあひはげむべきなり」（法然上人）のお言葉を。今こそありがたくいただく。

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』十一月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

僅疫癘、偏く天下に満ち、広く地にはびこる。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半に超え、之を悲しまざる族（やから）敢て一人もなし。然る間、或いは「利劍即是の文」を専らにして西土教主の名を唱え、或いは衆病悉除の願を待みて東方如来の経を誦し、或いは病即消滅、不老不死の詞を仰ぎて、法華真実の妙文を崇め。……

この世の乱れ、災害の惨苦に対処するとき、日蓮は善導の「利劍即是の文」をマジナイの一句と解している。もちろん「法華経」「薬王品」の不老不死の功德も前面に押し出してくる。そしてこれを結ぶにあたって、

——三宝、世にいまし百王未だきわまらず、この世早く衰え、その法何ぞ廃れるや。これ如何なる禍いに依り、これいかなる誤まりに由るや……（中略）世みな正に肯き、人悉く惡に帰す。故に善神、国を捨ててあい去

り、聖人、所を辞して還らず。是を以て魔、来たり、災起り、難起る。言わずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず。

要は「世みな正に肯き、人悉く惡に帰す」なのである。その「正」が「法華経」であることは言うまでもない。

それにしても天変地天、すべてが善神の加護で平和に復すると日蓮は信じている。その善神とは誰であろうか。天照大神をはじめとしたこの国の神々である。日蓮が立つ風土を呪術で閉鎖された古めかしい社会と断じた所以である。

インドでもそうであったように都市におけるきわめて人間主義的な釈尊仏教が、農耕社会の古風な土俗との習合において滅亡の道をたどらざるを得なかった。日蓮主義もまたその呪術性を基盤とした排他主義に固執する限り、富士講系列にみる反社会性へ落ちこんでゆく事実を否定できないのである。

インドから日本へ。仏教のヒンズー化から日蓮主義へ、と直行したわけではない。当然、中国という巨大な媒体を経ている。

その媒体となったのが天台智顗（五三八―五九七）の法華思想である。彼は大乘經典を五時に分類し、その窮奥に「法華經」を置いた。ここでは天台法華思想を詳細に分析しているゆとりはない。唯一点だけ「觀無量壽經」の解釈をめぐる、善導と天台智顗との異差を指摘するにとどめておく。

すでに触れたことだが、善導は「觀經」における韋提希夫人の「悟入」（菩薩と成る）を凡愚なるがゆえの阿弥陀仏の絶対慈悲と主張した。なぜ強烈にそこを主張したかと言えば、従来の天台智顗を中心とした韋提希夫人「悟入」が「王后なるがゆえに」と階級的な自証に倚りかろうとしていたからである。

これでは正しい浄土教の解釈ではないのみか、大乘思想とも矛盾してくる。

天台智顗は梁の武帝亡き後の中国仏教界に

現れ、梁武帝を斃した陳王朝に仕え、さらにこれを滅した隋の煬帝の庇護下にあった。王権は智顗の頭上から拭ぐい去ることのできない護符であり、呪いの札でもあったのである。

日蓮がその天台智顗の思想を継承し、比叡山を捨てた法然を「念仏無間」と邪惡視し、道元を「禪天魔」と罵った心情は充分に理解できるとしても宗教思想から判断したとき、きわめて低級な権力闘争と言わざるを得なくなる。

さて、話はだいぶ脇道にそれたが終南山含風殿へ戻らねばならない。

則天武后は善導にみちびかれ、懺悔三昧の明け暮れを送っていた。そんなある日、母親の榮国夫人（楊氏）が前ぶれもなく長安城からやってきたのである。ひとりの方士を連れていた。

方士としては若い四十がらみの美形な彼は、控え目な口調で消息をつたえた。

「巖松山ねえ。なつかしい山です」

武后は軽く眼を閉じて遠い故郷を思いえがこうとする。母親の楊氏も同調した。

「ほんと、うっかり忘れていたところだよ」

「忘れてはならないお方だったのにねえ」

「わたしたちが今日あるのも袁先生のおかげよ。三十年も昔にずばり予言されたんだからねえ」

「そうよ。あの予言……そうなのお母さま。」

わたしたちの喜びも悲しみも、じつはあのとき決定していたんだわ。かたわらにいたお姉さまの運命もねえ」

「おお、あの子……」

いまは亡き長女の韓国夫人を思いうかべ母の楊氏は首に巻いた帛で両眼をおおうた。

「すべてが天なるかな、命なるかなだったのよ」

かたわらにいた憚良は判断のつかない眼で

叔母の武后を見つめる。長女や孫たちを次女則天武后の野望のため短期日に喪ってしまつた祖母である。いま叔母は心からその傷ついた胸を癒やそうとしているのか。それとも天命にゆだねて自分の行為を正当化しようとするのだろうか。

少年憚良が見ぬける道理はなかった。ただ、善導さまがおみえになる都度、あれほどさめざめと泣き崩れる叔母ではないか。祖母への優さしいいたわりと考えるのが正しい、と判断した。

ところで方士の師匠だという巖松山の袁先生とは何者なのか。武后母親とどんなにかかわりがあったのか。憚良はやがて知った。

巖松山のある利州、則天武后はそこで生まれたのである。現在の四川省広元県にあたる。父がその都督として在任し、いたときである。

武后の父、武士カクは山西省文水の材木商だったが、財を成して、同郷出身の李世民

（唐太宗）に惜しみなく献金した。唐王朝が成立すると官界入りを果たした。先妻の相里氏を離別し、隋王家の一族たる觀王楊雄の姪にあたる榮国夫人（楊氏）を後添えにむかえた。出世の速度はたかまり各地の長官を経て、工部省尚書にまで榮進した。工部省は建設關係を管掌する往所で、尚書は長官である。

武士カクが四川省長官だったころ、則天武后は誕生したわけだが、武士カク夫婦はわが子の将来を、蜀の国きつての方士とうたわれた袁天綱に占わせた。

「男児ですね」

と袁方士は念を押した。

「そうです。男の子です」

妻の楊氏は答えた。

じつはこの日、夫婦は武后を男児に仕立てて方士の家へ連れてきたのだった。さきに長女（後の韓国夫人）をもうけ、こんどこそ男児を、と望んだのに結果は裏切られた。占い次第ではこの子、男児として育ててもかまわな

い、と夫婦は語り合ってきたのである。

「男児ですか……まあ立派に育つでしょう」

「立派に育つとは、どの程度に？」

「健康で。綺麗なお嫁さんをもらって」

「役柄は？」

「お役人になさるのですか。あまり向いていませんな。商人がよろしい。充分に財を築いてくれますよ」

「商人ですか」

夫妻はがっかりする。ところが袁方士もここで溜め息まじりに不可解な言葉をつぶやいた。

「男児ではねえ……もしもこれが女の子だったら……」

夫妻は聞きとがめた。

「女兒だったらどうなんですか」

「竜瞳鳳頸、貴験を極める相をなさっている」

瞳は竜に似て、頸すじは鳳凰の鳥のようで、貴い極みであるという。

「それは、何の相でしょうか」

「天子さまになる相なんです」

「天子さまにですか……女性の天子さまですか。そんな話、聞いたこともない」

「たしかに。かつて、この国で、女性の天子はいなかった。でもこの赤児、もしも女だったら天子になる人相をしているのだから致し方がありません」

袁方士は断定的な言いかたをする。よほど強い「卦」が現れているのだろう。

夫妻は顔を見合わせた。じつはこの児、女だったんですよ……咽喉もとまで出かかっている言葉を、どう始末しようか。

結局、夫の武士カクが慎重な方法を選んだ。

「そうか。女兒だったら天子の相か。男児でよかった。そんな大それた人相を持つ赤ん坊の前途にろくなことはないよ」

妻を慰さめるように言った。

その夫が他界して、次女の武后をとりまく

運星は、太宗の死後、俄然数奇の道をたどりだしたのである。

「あれから何度、袁先生をお招きしようと思ったか。いいえ、使者を二度も利州へ送ったんですよ」

母は武後に打ち明ける。乳幼児期のあの「卦」は未だ消えずに残っているのかどうか。

「そうだったの」

則天武后は淡々とした表情だ。

「でも袁先生は来てはくれませんでした」

「それは、お出にはならないでしょう」

武后は弟子の方士へ視線を投げながら言った。

「おや、なぜでしょうか」

「だって……」

それ以上は口にしなかった。

自分が女帝となる星を信じて疑わない則天武后。母の楊氏は未だ疑ぐっているし、不安も感じているのだ。

「それでお母さま、この先生は？」

用件をたずねた。

「袁先生からおことづけがあるんだよ」

「どんなおことづけですか」

則天武后の長いまつ毛が微妙に揺れ動いた。少年憚良は知っている。叔母がこんな眼で相手を見るときは、すこぶる上機嫌であることを物語る。

「あなたは書画をしつかり学ばなければいけないとおっしゃっています」

「書画ですか……それで、あなたがその先生になって下さるんですか」

武后はうるんだような瞳を方士へ向けた。

女帝となるからには書画の心得がなければならぬ……袁天綱の意志を即座に洞察した。

「はい。袁先生ならではの秘法を、伝授申し上げなければなりません」

「袁先生の御秘法をねえ。有難いことですわ。ところで先生、お名前は？」

「そうでした。王袁明と申します」

「袁明の袁はやはり大先生の？」

「そうです。ほんらいは徐明だったのですが、袁と改めました」

現在は王袁明、旧名は王徐明だったのである。



柿の葉に論文を書いて官吏となった貧乏書生の王徐明が、太宗の死とともに下野した褚遂良大臣の供をして長安を去ったことは、すでに書いた。

褚遂良自身はあのあと、じきに中央政界へ返り咲いた。しかし王徐明はそこで消息を絶った。褚大臣に同行したそもその目的が書道の研鑽だった。現に褚遂良自身、すべての官位を捨て去って、晩年を筆硯を友に生き抜くつもりだったのである。それが中央政界へ逆もどりだ。王徐明がこの師と袂を別ったのは当然であろう。

☆☆

月

明



蜀の国へきた王徐明は老方士の袁大綱とめぐり遇う。彼が説く陰陽五行や風角星算に魅かれたわけではない。巖松山の洞窟で、月明を頼りに運ぶ筆の跡、その雄渾な筆勢に王徐明は枯れることを知らない「いのち」を見た。たちまち老方士の膝下に参じ、師事したのだった。

袁大綱は書と合わせて絵も見事なものを描いた。

当時の絵画は「存乎鑒戒者、図画也」と魏の曹植が主張したように画材は教訓を主体とした鑒戒（かんかい）でなければならなかった。だから歴史上の事実や徳の高い聖賢、時としては甚だ不徳な人間が選ばれて、その行績や悪業が描かれた。

唐王政が安定期へはいると、思想や文化の拡散化につれて「自由の氣」が書画の世界へも浸透してきた。あまり教訓なぞにとらわれず、自然の風物や花鳥、天変地異の凄さまじさ、奔放な人間像が好んで画材となった。

従来の絵画は「彩色」が重視された。やたらと緑青、群青、金泥を塗りたくってきた。そうした壁画や屏絵が才能ある画人たちから忌避されるようになった。麻紙や白帛に墨一色で描かれる画法が愛され、やがてこれが南北宋画となって中国画壇の主流を占めるのであった。

王維の南宗画、李思訓の北宗画はただに絵画における二大潮流であったばかりでなく、唐初代の思想界をおおうた仏教の禅をも南北に分けるきっかけを作ったのである。つまり禅僧たちは墨絵を好み、おのずと北宗禅と南宗禅に色別されていった。

もちろん、これは則天武后のあと、玄宗の治世ころからで、巖松山の洞窟で鶏毛筆を握る袁天綱は奔放に奇怪な人物像を描き続けた。

「これは何ですか」

「木霊が体中へはいりこんでしまったのさ。木の精と人間の魂とが同居していると、こん

な騒ぎを巻き起こす」

その植物化した人間は凄さまじい形相で中天に向って掴みかかろうとしている。おそらく彼はそこに敵の幻影を発見したのであるう。

そんな袁天綱の傍らにいと、王徐明はやたらと楽しかった。いや、もはや徐明ではなく袁明だ。方士となる将来を誓ったからこそ師はこの洞窟に棲むことを許してくれたのである。

袁天綱は鬼の絵を愛した。巖松山の絶壁から見下ろす谷底。その雲霧立ちこめる空間に次々と鬼が現れるというのだ。袁天綱は老いの眼をそこに見据えて、鬼の輪郭に迫ろうとする。形にならない鬼もいた。滑稽な奴もいたが、王袁明の肌に粟立ちをもよおさせる不快で恐ろしい鬼もいた。

そんなある日、師の袁天綱は長安へ帰ることを命じた。目的は、則天武后母娘に彼の画帖を届けることだった。

「いったい、この絵は何ですか」

「お手本です。先生はあなたがこの絵をしつかりと御覧になって、これの模写から手始めになさるように、とおっしゃっています」

吏生時代の王徐明と全く変っていなかった。几帳面そのものだった。

「こんな得体の知れぬものを描くのですか」

しかし、武後の表情は綻ろんでいた。お手本の奇怪な内容よりもこの若き方士について絵の手習いを開始することが楽しいのである。

「これこそ袁先生が、利州の山上で出会われたさまざまな「物の怪」なんです」

「その「物の怪」がどうしたというのでしょうか」

「それは、なぞりながらおわかりになるのではないでしょう。袁先生のお言葉だと、天子になるほどのお人は、美德に数倍した魔性をお持ちだそうですよ。その魔性の一つ一つが絵筆によって明るみへさらけて出てくるん

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 十一月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十一年十月二十五日 印刷

昭和六十一年十一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八―八二―八七番

待望の新刊

毎日新聞社刊

寺内大吉 著

『沢庵と崇伝』上、下 (全二冊)

— 黒衣はためく日々 —

たくあん漬けで名を残した沢庵と……

この国の官僚の原型となった崇伝……

上巻二六二ページ 下巻二九二ページ

A5判上製 定価 各二二〇〇円

△発行△ 〒100 東京都千代田区一ツ橋 毎日新聞社

第五十二巻 十一月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十一年十月二十五日印刷 昭和六十一年十一月一日発行